

自由との契約

第二部

五味川純平著

三一新書

自由との契約 第二部

定価 160円

1959年7月25日 第一版発行

1959年7月30日 第二刷発行

著 者 五味川 純 平

1959年

発行者 田 畑 弘

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 桂川製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

京都市左京区北白川西平井町 24

電話 (7) 3101, 3885

振替 京 都 6403番

東京都千代田区飯田町2の14

電話 (33) 9393, 5657

振替 東 京 84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 三一新書 183

自由との契約

第二部

五味川 純平 著

三一書房

第二部

宵のうちから節電で大通は暗かった。人影も疎らであった。冷えきった風が吹き抜けて行くたびに、朋子は外套の襟を合わせ直して歩いていった。寒いといっても、大陸の冬とは較べものにならないはずなのに、朋子はこれほど寒い思いをしたことはなかったような気がした。心の方が凍えがちなせいだろう。帰って行くねぐらはあるが、そこでかぼそい火を起こしたところで、心はぬくもらない。朋子は千石が来てくれさえすれば、このくらいの寒さは少しも苦にならないにちがいないのだ。千石からは便りが一度あったきりである。没収された荷物の目鼻をつけ次第に行くと言っていた。それがまだ来ないのは、目鼻がつかないのだろう。とても女のことどころではないというのだろうか。こんなことなら、あの密入国者の収容所から釈放してやると云われても、千石のそばを離れるのではなかったとどれだけ後悔したかしかない。

朋子はときどき足を早めたり、直ぐにまた気の抜けたような歩き方になったりしたが、路傍で秘密めかしい灯をともしている人相見を見かけると、一度は通り過ぎてから立ち停った。誰にもわからない先のことだから、なおのこと誰かに尋ねたいのかもしれない。辻占が吉なら吉で喜べばいいし、凶と出ればそんなものは問題にしなければいい。そう自分にうなずいてから、朋子は寄って行った。

「見て頂くの、いかほど？」

「百円」

灯影で、髯を生やした、枯木のような男が無愛想に云った。この商売は初手から威厳を示さねばならぬもの

のようである。

朋子は氣紛れを起こしたことを悔んだ。百円はいまの朋子にとってはおろそかにできぬ金高である。けれども、足は停ったまままでいた。

「手を出しなされ」

と、男が云ったが、手を見るより先に、上眼使いで朋子の顔を見ていて、

「あんたは後家相じゃね」

と、ものものしい云い方をした。

朋子は胸の中で後家じゃないわと反撥しようとしたが、後家に似た状態にあることがどうして見破られたのか、薄気味悪くなった。それだけ、既に、相手の云うことを信じ易くなっているのである。そこへ、かぶせて、

「待ち人があるじゃろ？」

と来た。

「……ええ」

「来んよ、この仁は」

と、人相見は灯影で水ばなをすすって、そのみっともなさをつくろうかのように、ますます勿体ぶった。反対に、朋子は少なからずうろたえた。

「どうしてですか？」

来ぬはずがない。千石は忙しいだけだ。朋子をヴェラのように愛さなくとも、見捨てはしないだろう。

「その仁は、いま、失意の最中じゃろ？」
失礼なじじいである。

「……ええ」

「何かもくろんでいなさるようじゃがね、直ぐに来るようなら、あんまり思わしくなからうね」

「でも、来ることは来るんでしょう？」

と、朋子は、すっかり真剣になってしまった。

「さよう。思いがけんときにひょっこり来るじゃろうが、来るのは……」

と、老人は自分の指の節を数えて、さも根拠があるらしく、きっぱりと云いきった。

「来月の月はじめ。その十日の間に、来るようなら、開運の兆じゃね。したが、西の方は濁っとる。ようないね」

朋子は少し嬉しくなった。

「……あたし、しようと思ってることがあるんだけど……」

「何かね？」

と、易者は、朋子の手から顔へ眼を上げた。

「あんたは客商売で運が大きく開けるよ」

「客商売って……？」

「何であれ、他人とつきおうて行くとじゃね、がわからあんたを取り持ってくれる形が出とるよ。あんたはなかなか色濃いが、意中の御仁に操を立てとおそうとするじゃろう。したが、何人かの男があんたを取り巻い

て、それが、結局、あんたの意中の御仁を引立てることになる」

朋子は色濃いなどと人から云われたことはなかったので、度を失いそうになったが、意中の男を引立てることになると聞くと、勇気が出て来そうであった。

「あたし、勤め口がないんです。だから、思いきってダンサーか何かになってみようかしらと思うんだけど……」

そう独りごとのように云ってから、ためらいながらきいた。

「客商売にしても、工合の悪いことになりませんか？」

これは千石とのことを云ったのだが、相手はこう答えた。

「普通なら色濃いおなごは身を持ち崩すじゃろうがね、あんたはうまいこと救われとる。あんたは後家相じやが、栄えるよ。衣食住に窮するようなことは絶対ない」

「……そうかしら」

朋子は冷えきった顔の肌の内側が少しづつぬくみを持ちはじめたような感じがした。

「……その、あたしのとこに来る人、来てから、どうにかかりますか？」

「そうさね……」

人相見は考えているような恰好をしたが、何も考えてはいないのかもしれない。

「来よう来ようとしとるらしいが、この仁はどうも一足ずつおくれる型じゃね」

そんなことってあるもんですか！ 朋子の知っている千石は、後手に廻る男ではなかった。それでも、朋子は、不安から、そっときいた。

「じゃ、駄目……?」

「いや、そげんことはなか」

と、人相見がはじめて訛をまる出しにした。

「したが、運勢の榮ゆるとは、おなごのあんたの方が先じゃろ」

「……そう……」

朋子は財布を出した。

「どうもありがと」

人相見は、これだけ教えてやったんだから百円は安いぞ、と云わんばかりの態度で受け取った。

歩きだしてから、一番先きに來たことは、大道易者に見てもらったなどと云えば、千石がさもさも呆れたように笑うだろうということである。笑われてもなんでも、いまの朋子には心の倚りどころが必要であった。千石はまだ来てくれないのだ。彼は別れるときに、「逃げるわけじゃないがね、僕は当てにならない……」と云った。はったりも云わなければ、逃げも打たない男だから、当てにならないと云うからには、そうなのにながいない。つまりは、自分自力で何かしているということである。売り食いはやがて底を衝く。衝いてからでは間に合わない。けれども、何かをしようにも、何をすることもなければ、何ができるということもない女なのである。いままではそれで済んでいた。それでは済まされなくなるときが来るなどは考えてもみなかったのだ。いつかも千石に手紙を書いたように、結局女であることで使ってもらえるところぐらいしか、朋子がさし当って働く場所はなさそうであった。

考えてばかりいたってしょうがない。できそうなことからやってみるんだわ。そのうちには千石も来てくれ

るだろう。開運の兆なんだそうである。たかが辻占の世迷ごにしたらところで、吉と出れば、やはり気持は悪くない。

朋子はひっそりとした街路を歩きながら、千石のやさしいのか薄情なのかわからぬ顔と、これから触れるであろう金銭を媒介とした人間関係との間に、狭く限られた考えを往きつ戻りつさせていた。

2

辻占は当たったらしかった。ダンサーになった最初の夜から、椅子を空しく温めるようなことはなかった。思いついてダンサーになってみたのは、ダンスが格別好きだったのでも、巧者だったのでもない。数年前に閑つぶしに研介から習い覚えた社交の遊びの程度にすぎない。それでも、女給になるよりは気持の上でなり易かったし、収入もありそうだったから選んだのだが、いずれにしても、千石と会って彼の生活に合わせて行けるようになるまでと思つてのことである。

最初の夜から意外にチケットの稼ぎ高が多くて古顔の機嫌を損じるほどだったのは、常連らしい塩沢という男が朋子に目をつけて、ほとんど朋子の体をあけないほどに踊りまくったのだ。この男は、胴長の、どちらかと云えば不細工な体つきだが、新調の脊広を着こなした恰好には一種の風格があつたし、脚は短いのに踊りは朋子などより遙かにうまかった。齡は、朋子の眼には、千石より三つ四つ上と見えた。その後毎晩現われて、ほとんど朋子としか踊らないのだが、踊るときには適当に体を離していた。つまり、いやらしいという感じを起こさせないのである。

最初の夜、朋子は、客にこぼれるようなサービスをしたり、さも音楽に酔ったようにして踊るところではなくて、カチカチになっていた。そのせいで、なんでもないとこでステップを二度ほど間違えてしょげてしまふと、塩沢は人のよさそうな笑顔で云った。

「コンテストに出場してるわけじゃないんだから、どう踊ったっていいんですよ」

そのあとで、言葉の含みが少し加わった。

「踊りがうまくなると、他のものを失う人が多いでしょう」

塩沢が朋子を放さなかったのには、好感以外にも理由があるらしい。そのダンスホール「マイアミ」には進駐軍の客が多くて、中にはジャップのダンサーなどは玩弄物ぐらいにしか考えないのがあることが、ひどく痞に障るようであった。朋子は、デブの一件以来、進駐軍の兵隊は極力避けていたが、一度つかまって数人の間をタライ廻しにされかけたことがある。兵隊たちは数人で出し合ったチケットをはずんだら、女を連れ出してモノにできると思っていたらしい。そういう気配が朋子に感じられはじめたとき、塩沢は他の女を連れて来て、朋子と代らせようとした。

「代ってもらえるとありがたいんだが」

と、塩沢が兵隊に云うと、

「何故だ？ こっちはあんまりありがたくない」

と、兵隊が返した。

「私は私のパートナーを他の人に取られるのを好まない」

塩沢がそう云うのへ、兵隊はせせら笑った。

「お前のだ？ その女はこの女だろ。誰の専属ってことがあるか」

「冗談云いなさんな」

と、塩沢は笑い返した。

「俺はこの女に全財産を賭けようとしてるんだ。G Iの給料ぐらいで横取りされてはたまらんよ」

G Iは険悪な表情になりかけたが、塩沢から多額のチケットをもらった代りの女がべったりくっついたので、勝手にしやがれとでも云うように大きく手を振って、ケリがついた。

「あとが面倒なことになりませんか？」

と、朋子が気づかっても、塩沢は場慣れしているのか、もうさばさばした顔つきになっていた。

「なに、あいつら、女でさえあればいいんです。チケットさえくれりゃ相手は誰だっていいという女もいますからね。僕は、どうも、毛唐ののっぽが脊をまるめてあんたに頼ったをくつつけるとこなんか見たくない」

「それはどうも……」

朋子は男が口説きにかかっているものと警戒して、ぎこちなく口ごもったが、外人の所業となればたいていが傍観するときに、塩沢の態度が珍しいものに見えたのは事実である。

「……御商売、何ですの」

と、はじめてきいた。すると、塩沢は、さっきのG Iの方へ眼を走らせてから、笑った。

「いまはね、外人相手にみやげもの屋をやってるんです。サンキュー・サー。サンキュー・ママを繰り返してるわけですよ。ペコペコしてね。あの連中は僕の上得意だ。しかし、商売とこれとは別事ですよ。店に外人

が日本の女を連れて来ます。女はたいてい、あんた方とは大分ちがう。外人と腕を組んだり首っ玉にぶら下つてるところを同じ日本人にみせびらかして、何か特権があるみたいな顔をしてる手合です。それに僕は愛想笑いをしてペコペコするんだな。なに、文学的な自己嫌悪で云ってるんじゃないですよ。これが商売のときの僕。パンパンだって外人にねだって僕の品物を買わせてくれる分には、ありがたいお得意さまです。軽蔑はしませんね。真剣です。サンキュー・ベリ・マッチです」

塩沢はまっ直ぐに見ている朋子の眼を、これもまっ直ぐに見返した。

「だけでも、商売を離れたら、連中は何ですか。戦争に敗けたんだから仕方がないとは云い条ですよ、僕は連中が支払う金銭以上の権利も価値も認めたくはありませんからね」

その塩沢が、何回目かの夜に、こう云い出した。

「ここをやめて、僕を手伝ってくれませんか」

朋子は小首をかしげて微笑を含んだだけで、黙っていた。世間話で聞き知っているような、男の出方というものを、塩沢もとうとうはじめたという感じであった。塩沢はそれに気がついたらしかったが、あわても悪びれもしなかった。

「僕があんたにお願いしたいのは、みやげもの屋の方を僕に代ってやってもらいたいということです。僕は仕事を作り出すことには少々自信があるらしいが、維持して行く段になるとさっぱり気が抜けるんです。いいかげんな気持でやって行くには惜しい程度の収入がある店なんですがね。あんたに店にいて頂くと、売上ももっと上るにちがいないし、僕は僕で他のことができるというわけで、好都合なんだが……」

「駄目ですわ。自信がありませんもの」

と、朋子は軽くいなそうとした。

「英語もろくにできない女が、外人相手にどうしますの？」

「英語のできる若いのは店にいますよ。僕はあんたに店を取りしきってもらいたいんです」

「だったら、なおむつかしいじゃありませんか……」

朋子は男性の野心の方を通俗的に警戒しすぎて、それが一つの機会の訪れかもしれぬとはまだ思わなかったが、辻占を思い出して何処か肚の底の方から何かが動きはじめたのは、塩沢がこう云ったのを聞いてからである。

「試しにあすでもあさってでも店を見て下さい。僕が案内して行くとなると、それからお茶でも呑んで、それからまたなどと勘ぐられるのも厭だから、あんたが勝手に表から見に行って下さるといい。僕は一度ぐらい振られたからって諦めませんがね、あんたにしたって、考えてみるだけの値打はあるだろうと思うんです」

朋子は、塩沢のが好意だけではないにしても、打算だけでもないような気がした。大体好意だけで事が運ぼうとは、朋子がいくら世間知らずの奥さま上りでも考えられないのだ。そうだとすれば、男の好意と打算と欲望の緋い交じったものとして、こちらもそれらしく対応して行けばいいのかもしれない。それでも朋子は返事を濁ごしていたが、数日後に塩沢の店を見に行ったのは、気持がかなり傾いている証拠だろう。表から覗くと塩沢がいなかったので、客をよそおって入って行った。街中の角店で、十坪ほどあるからかなりの値打にちがいない。それよりも、店が明るくてすっきりしていることが、朋子の気を惹いた。品物を見ているふりをして、いる僅かの間に幾組もの客が出入りしたところを見ると、塩沢はあまりホラを吹いてはいないようである。

朋子は、ふっと、その女主人として店に立っている自分を想像したりした。それは充分に希望的な構図だ

ったが、そのときの千石と自分との関係が、想像の中では全く曇っていた。朋子は、塩沢に頼んで、千石を代理人として入れてもらって、その下で朋子が働くようにしたいなども考えてみた。塩沢はたぶん承知するだろうが、千石が承知すまい。瘦せても枯れても彼は千石である。C市のビッグ・テンに数えられた男が、サンキュー・サー、サンキュー・マムは潔しとしないだろう。そういうふうに事を運びたがった朋子を、千石は非難するだろう。朋子は、そこで、そこにはいない千石を怨んだ。彼女がどんな空想をしたにしても、それは千石が来てくれないからだ。千石が来て指示を与えてくれさえすれば、朋子は塩沢の申出に傾いたりはいしないのだ。要するに、千石が悪いのだ。

あの人は何処をうろついているんだろう！

それから数日後に、塩沢はまた朋子に懇請した。

「あたしを買いかぶっていらっしゃるんですわ」

と、朋子が云っても、買いかぶられて喜ばない女はいないし、経験の浅い者は買いかぶられると不安は生じて迷惑としては受け取らないから、相手を断念させる力はない。

「僕は無一物の復員者でね、街じゅうをほつつき歩いて、巾着切りみたいに闇で稼いだ男です……」
と、塩沢が述懐した。

「儲けにかけてはあくどい代りに、抜けたところもあるんです。あくせくしたから、あくせくするのが厭ですね。なんて云いますか、ふわっとした夢みたいなものですね、自分の眼鏡であんたを選んだんなら、それで店がどうなったって悔みはしない。気楽にやって下さいよ。大丈夫、最初のうちは僕がコーチします。直き覚えですよ。しまいには店のことではあんたの方が僕に指図するようになる」